

# 駿府城跡天守台の 発掘調査





# 天守台の発掘調査

今回の駿府城天守台の発掘調査では、従来絵図などで知られていた慶長期の天守台ほか、その内部から天正期の天守台が発見された。さらに天正期天守台の下層から今川期の遺構も見つかった。慶長期天守台は大御所徳川家康が天下普請で慶長12年(1607)より築いたもので、建物である天守は慶長15年(1610)頃完成した。天正期天守台と天守は文献史料(『家忠日記』)から、豊臣家臣となった家康により天正15~17年(1587~89)に築かれたことが判明した。

発掘調査の目的	調査期間
<b>駿府城公園天守台跡地の整備方針</b> を決定するため、事前に天守台の正確な位置や大きさ、石垣の残存状況などの <b>学術データ</b> を得ること	<b>ア 現地調査:4年</b> 平成28(2016)年8月~ 令和2(2019)年3月 <b>イ 整理作業:2年</b> 令和2(2019)年4月~ 令和4(2022)年3月

表1 発掘調査の目的・調査期間

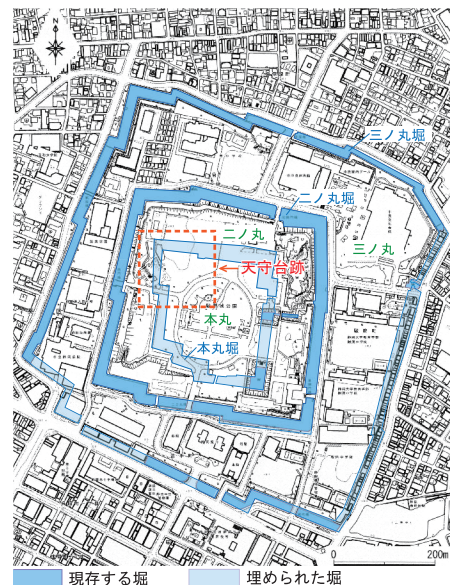


図1 駿府城全体図

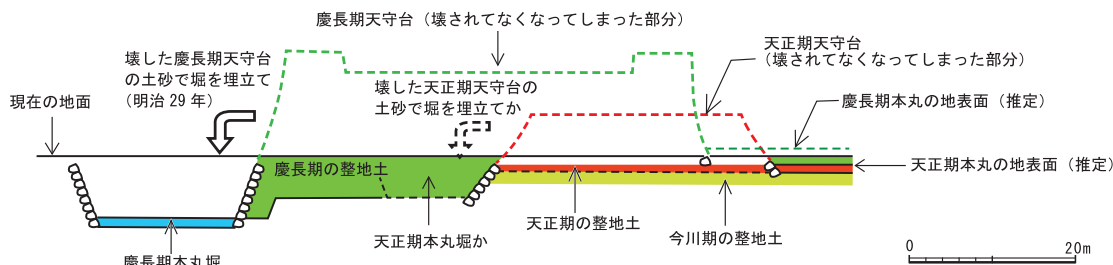


図2 天守台発掘調査断面模式図

## 今川期の遺構と遺物

天正期天守台内部に残っていた今川期の遺構面より、断面V字の屋敷地の区画溝(薬研堀・写真2)と池状遺構が発見された(写真1)。池状遺構や天正期天守台石垣の裏込石から出土した遺物のうち、青磁の酒海壺(1)、長頸瓶(1)、水盤(3)、大皿(2)、染付の酒海壺(5・6)、赤色染付(釉裏紅)の小形長頸瓶(4)などの守護大名が所有するにふさわしい高級中国製磁器(写真3)が出土していることから、今川氏館の一画である可能性が考えられる。

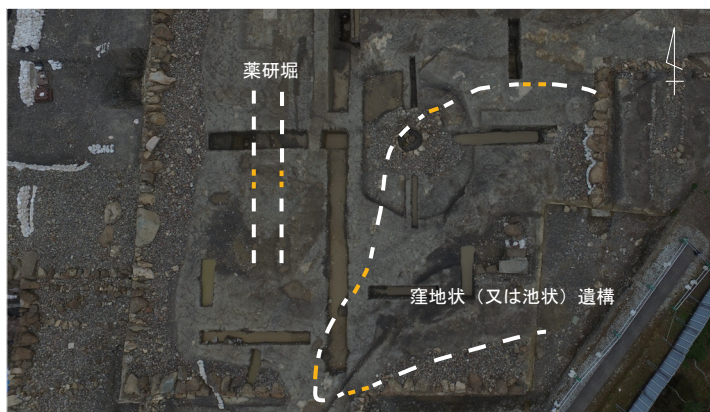


写真1 今川期の遺構



写真2 薬研堀



写真3 貴重な中国製磁器



# 天正期の天守台

慶長期天守台により上半分を壊されてはいた（破城<sup>はじょう</sup>）が、内部より自然石や割石を積み上げた野面積みの石垣（写真5・6）による天守台が発見された。確認面での大きさは東西約33m、南北約37mの巨大な天守台で、東側に渡櫓台と小天守台が接続する<sup>れんけつしき</sup>連結式天守であることが確認された（写真4・図3）。天守への出入口は南側に石段を伴うと考えられる石垣も見つかった。また天守台中央部分からは石積の井戸も発見された。付近の慶長期整地土から大量の金箔瓦が出土したこと（写真7）から、豊臣政権の象徴である金箔瓦が葺かれた天守であったことも判明した。

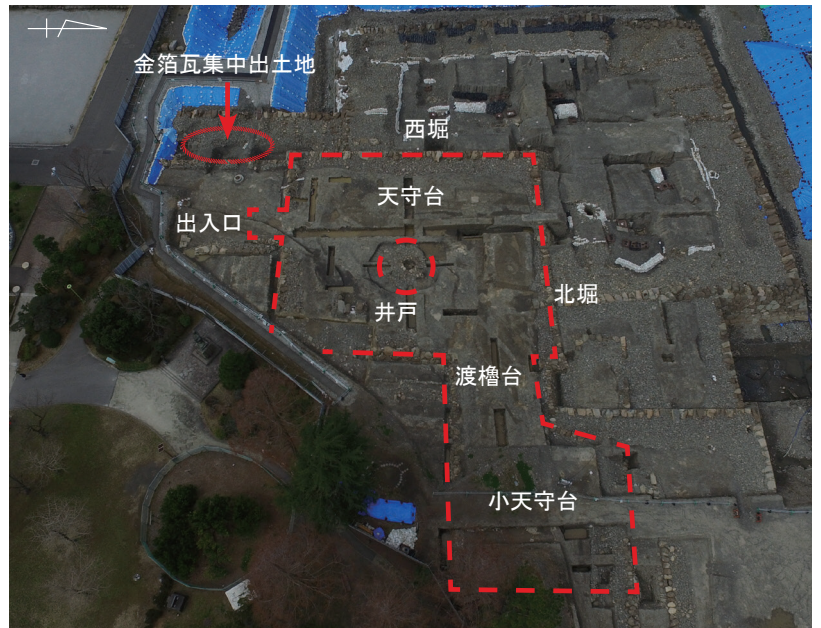


写真4 天正期天守台石垣（東から）



写真5 天守台北面石垣



写真6 天守台北面石垣・北西隅角部

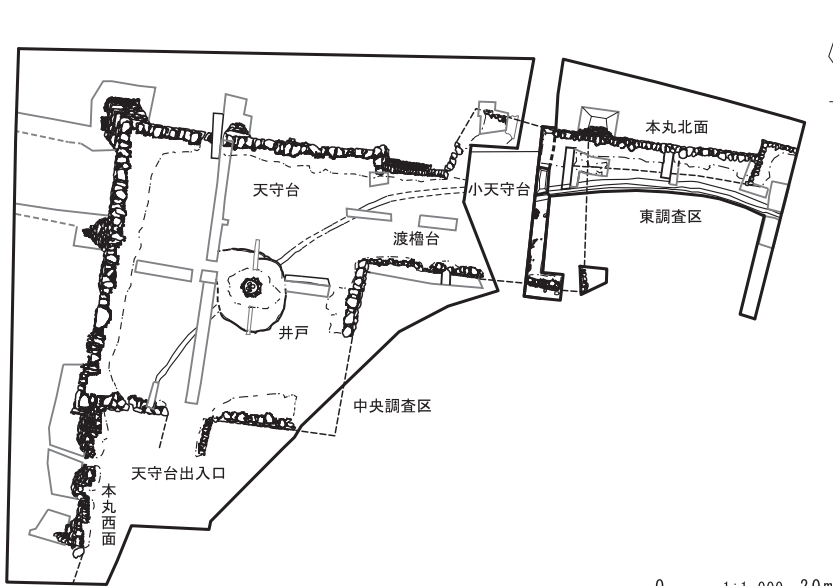


図3 天正期天守台全体図



写真7 大量に出土した金箔瓦



# 慶長期の天守台

明治29年(1896)の陸軍歩兵第34連隊の設置に伴い、上半分を壊されていたが基底部での大きさが東西約63m、南北約69mの規模となることが確認された。四隅に櫓、内部に天守が建てられた環立式天守であったと考えられている。慶長期の石垣は割石の表面が加工され、割石間の隙間に小さな石を詰め打込接ぎの積み方である(写真9)。南側に天守への出入口である小天守台の石垣(写真8・図4)、東側に本丸北側の出入口である天守台下御門虎口の石垣と堀底から木橋の痕跡(写真10)が発見された。遺物は天守や虎口の門などに使われていた瓦(写真11)が出土している。

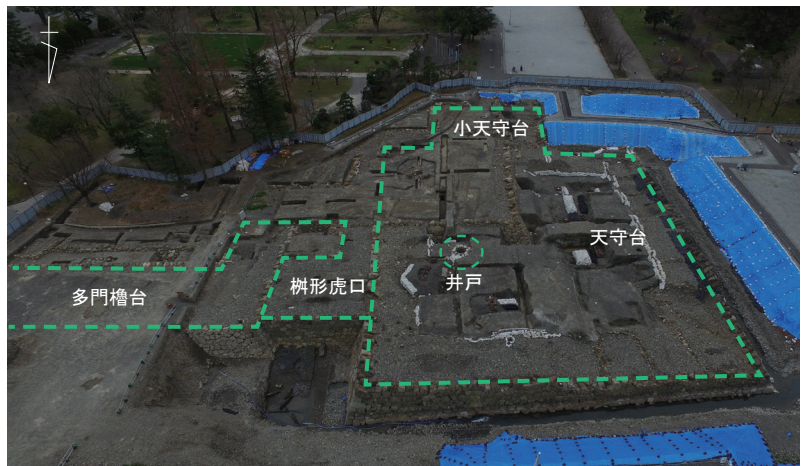


写真8 慶長期天守台石垣(北から)



写真9 慶長期天守台北面石垣(北から)



写真10 天守台下御門と堀底(北から)

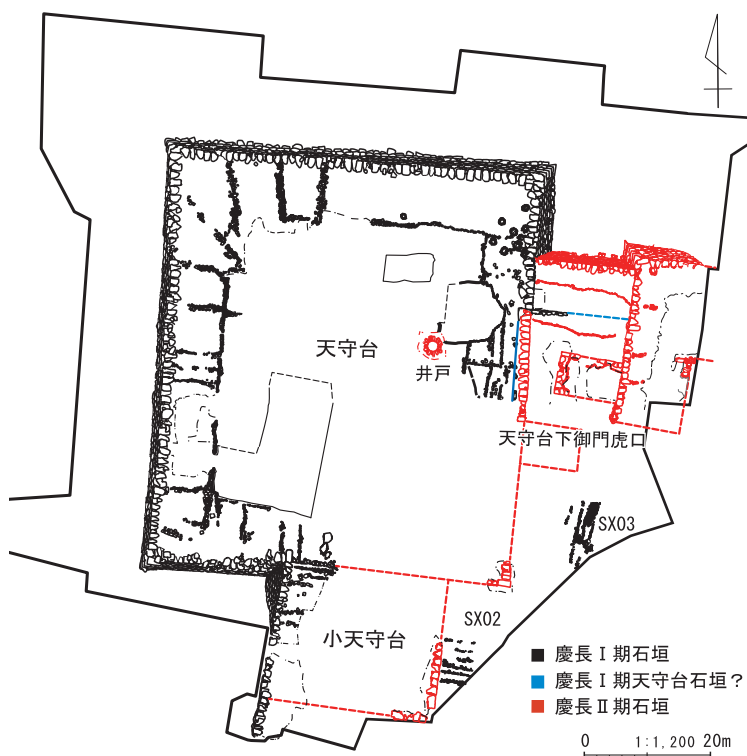


図4 慶長期天守台全体図



写真11 江戸時代の瓦